茶杓

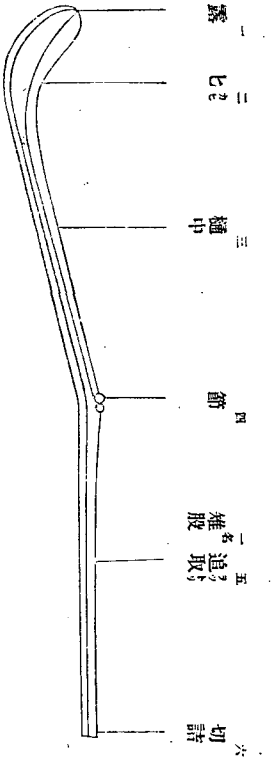
〔下學集下器財〕茶酌（シャク酌可作杓）

〔和爾雅五茶器〕茶匙（サジ茶鍬同）

〔書言字考節用集七器財〕茶杓（チャシャク一名撩雲、見必用）

〔倭訓栞前編十五知略〕ちや○中略　茶杓と稱するは茶匙也、撩雲も同じ、

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕茶匙（ちゃさじ俗云茶杓）



長六寸一分　節以上席目七ッ以下席目六ッ

按、俗誤以藥匙稱茶匙、而茶匙乃稱茶杓、以別之、珠光、宗珠、紹鷗、利休、慶首座、瀬田掃部、少庵、道安、道珍等茶人、自所削者價貴爲家珍、又泉州堺有甫竹者、世削茶匙得名、其長以疊目爲寸、或以指横寸、

〔茶窻閒話中〕茶杓の名所　先のとがりを露（ツユ）といふ、其留りを刃先といふ、茶をすくふ所を總名匙（カヒ）形（カタ）といふ、又かひさきともいふ、眞中に一筋落入たる樋のあるをうば樋といふ、眞中に高き筋ありて、前の方に落入たる樋のあるを兩樋といふ、節柄（フシツカ）の留（トメ）、うらおもて、又ふしなしの茶杓もあり、柄のはづれに節の有もあり、二代目宗佐の作などにはあり、

〔和漢茶誌二〕茶匙總名也